
腐女子高校生！！

桃色羊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

腐女子高校生！！

【Nコード】

N8874L

【作者名】

桃色羊

【あらすじ】

とある名門学校の落ちこぼれクラス、F組の生徒は、みんな自由で個性的。

だが、その楽しいクラスの中で、見え隠れする深い闇。だんだんと真実が見えてくる、多くの謎。

そして、誰も知らないうちに彼女の計画は動き出す。

絶望、憎悪、殺意、愛、嘘、友情、嫉妬、そして・・・真実。

話によってギャグ、BL、シリアス、NLなどと話が変わり、目線

も変わります。

話が後半になってくると、過激になってきますので、注意。

人物紹介

栗原 楓くりはら かえで（女）

- ・超重症の、腐女子。

立花 祐美たちばな ゆうみ（女）

- ・楓の腐女子仲間。

中山 実六なかやま みろく（男）

- ・不運で、気が弱い。

高畑 英斗たかはた えいと（男）

- ・口が悪く、ドS。

蓮城 蒼れんじょう あおい（男）

- ・霊能力を持ち、成仏しない霊を自分にとりつかせ、好き放題させてあげて、成仏させている。

有間 美留ありま みる（女）

- ・あだ名は「アリス」

- ・好奇心旺盛で、楽しいこと、面白い事が大好き。

瀬川 亮太せがわ りょうた（男）

- ・あだ名は「白ウサギ」
- ・スキンシップが多い。

東野 拓ひがしの たく（男）

- ・あだ名は「チシャ猫」
- ・笑い方がハンパなく怖い。

担任

藤田

晴彦

(男)

- ・ 着任早々、落ちこぼれクラスを任された、
哀れな先生(24歳)。

人物紹介（後書き）

目線は、各話ごとに変わったりします。

1話 腐女子ですが、なにか？ (1) 〱実六目線〱

「ちよっ・・・栗原さん！？一体どこに行く気なのっ!？」

僕は今、同じクラスの栗原さんに
ぐいぐい手を引かれてる。

すると、向こうから誰かが来た。

「やめろ！何すんだよ、離せ！クソ女^{アマ}!!」

よく見ると、向こうから同じように、
立花さんに手を引かれて来る、高畑くんが来た。

すると、いきなり僕は前に押された。

向こうも同じく、高畑くんが押された。

こうして、僕と高畑くんは向き合うこととなった。

するといきなり、

「何か言うコトはないですか？お二人さん」

うれしそうに栗原さんが言う。

「ハア!??うるせーな。」

何も言うことなんかねーよ!」

高畑くんが怒鳴る。

「えっえっ!?!」

英斗くんは攻めなんだから、

英斗くんから言うべきなのに……」

「何だよ……攻めって……

っ!か、何を言うんだよ!?!」

すると、栗原さんに代わって立花さんが、

「もちろん、愛のコトバ、でしょお?」

「ハアア!?!なんで、こんな

腰抜け野郎に!?!」

え、腰抜け?

「え、じゃー誰?蒼くん?

亮太くん?拓くん?

でも、一番受けにふさわしいのは

実六くんなのに……」

「何で選択肢、全員

男なんだよ!?!

お前らの頭の中は、そればかりかあ!?!」

「モチのロン」

キレイにハモる二人。

すると、眉間にしわを寄せた
高畑くんがこっちを向いた。

「オラ、腰抜け!!」

「テーマもなんとか言え!!」

「ふ・・・ふえっ!? 腰抜け!？」

でも、絶対にこの二人、
反省しないよ・・・

だって、今の僕のセリフに対して
エロくない? とか言ってるし・・・

「う・・・あのっ・・・
やめて・・・下さいっ・・・!」

一瞬の沈黙。
そして・・・

「ヤバい、エロい!!」

「ダメだこいつら・・・
早くなんとかしないと・・・」

またハモる二人と、
呆れて長いため息をつく、高畑くん。

どうやら、ついて行けてないのは
僕だけみたい・・・

その時、また向こうから
何人かやってきた。

2話 腐女子ですが、なにか？ (2) 美留目線

「お、なんか向こうがにぎやかだな。
行ってみよーぜ」

ウサがにこにこしながら、言う。

チシャはこくんと一回だけうなずき、
私とウサで無理やり連れてきた
フード付きの黒いマントのようなものはおっている
蒼くんは、フードを深くかぶり、黙ったままだ。

「あ、ホントだ！あの声って、
楓ちゃん達じゃない？」

あ、英斗くんの怒鳴り声も聞こえてる！」

この二人って、微妙に似てるな・・・
と思いつつ、私も返事をする。

とゆーか、ここは廊下だから
よく声が響くのに、楓ちゃん達
おかまいなしに騒いでいるな・・・
何かあったのかな？

楽しそうに声の方向へと向かうウサ。
・・・もともとは「白ウサギ」ってあだ名だけど、
長いから「ウサ」と呼ばれてる。

チシャもそうだ。もとは「チシャ猫」だが、略して「チシャ」と呼んでる。

私は「アリス」のままだが。

チシャ以外は、みんなこのあだ名で呼んでいる。

チシャになぜあだ名で呼ばないのか

前に一度聞いたが、あだ名なのに長いし、

しかもそれを略すし・・・略すくらいなら、

名前で呼んだほうが早い、とのことだ。

まあ、正論といえば、正論なのだが。

すると、呆れた顔をしている英斗くんが見えてきた。

実六くんは私たちに気づいて、

ペコリと礼をした。

「何だよー、何か楽しそうじゃん！

何かあったのかよ？」

「あー、実は、実六くんの声が

見かけによらずエー「わあああつ！やめて下さいっ・・・」

ウサの問いかけに答えようとする

楓ちゃんの言葉を、実六くんが

半泣きになりながら、止めている。

一方、祐美ちゃんは実六くんを見て、
ヤバイ、男の娘っぽい・・・とか、

つぶやいている。

・・・一見、普通に見えるけれど、
違う。私はチシャの目線に気づいた。

また見ている・・・なぜ、みんなは
気づかないのだろう？

チシャの想いに・・・

私は複雑な気持ちの中、
この関係が壊れないように、と
強く願った。

3話 腐女子ですが、なにか？ (3) 〵楓目線〵(前書き)

今回は、1話と同じくらい楓がかなり暴走してるんで、
あらかじめご了承ください。

3話 腐女子ですが、なにか？ (3) 〱楓目線〱

私は腐女子だ。

いきなりなんだよと思うだろーけど、
言います。

腐女子ですが、何か？

ハイ、今イラつときた人ー、
正しいです。

共感した人ー、
もつと正しいです。

何も思わなかった冷めてる人は・・・
正座1時間ー。

とにかくまあ、腐女子なので、
毎日男子たちをいじるのが
日課だ。

今まで男子にした事はたくさんある。

実六くんの飲んてたお茶を

英斗くんに飲ませたり、

実六くんと向かい合ってる英斗くんの背中を
押し、実六くんを押し倒させた事だってある。

本当はもつとすごい事をしたいなと思っているが、

流石に、あの薬を飲ませるのh・・・っと、失礼。
今のは忘れて下さい

そうして、今日も男子をいじっていた。
そしたらいつの間にか、クラスのみんなが
集まっていた。

「あー、そういえばさあ、今日新しい先生が
ウチのクラスに来るんだよねー。」

祐美がはつとしたように言う。
そういえば、誰かがそんなコト言ってたっけ・・・？

「あ、何か思い出した。男だったらいーなー、
いじりがあるし」
若いとなおさらいいんだけど・・・」

「うんうん、だよねっ！！」

やはり、祐美も同じ考えのようだ。

「つーかさ、朝のHRもうそろそろ
始まんじゃね？
早く行かねーと、サボったコトに
なるかもだぜ？」

近くの会議室みたいな部屋に
かかっている時計を見ながら、ウサが言う。

「「え、マジ？やばっ！！」」

こういう時も、私と祐美はハモる。

そして、一斉にクラスへと走っていく。

ただ一人、蒼くんだけはアリスとウサに引っぱられながら行く。

やっとクラスについた。

どうやら、まだ新しい先生は来ていないようだ。

みんな、急いで自分の席へ戻る。

っていつても、真面目にキチンと

座っているのは実六くんだけだ。

あとは、私と祐美はペラペラ話してるし、

英斗くんは机に足を上げてるし、

蒼くんはなんかブツブツ言ってるし、

アリスには相変わらず動物たちが集まり、

ウサはやってきた鳥などの頭をなでていて、

チシャはマイ枕を取り出し、あっという間に寝始めた。

・・・そして、ガラガラと扉の開く音がした。

4話 新しい先生 〽藤田先生目線〽（前書き）

更新遅くなりました。

すいません。 「――」

4話 新しい先生 〱 藤田先生目線 〱

「大人になっても、イジメみたいなのはあるんだな・・・」

オレは深いため息をついた。

オレは教師になつたばかりだ。

けど、いきなり落ちこぼれクラス、

F組を任された。

周りの教師仲間の目は、

明らかに哀れみの目だった。

いろいろ考えてるうちに、F組の前まで来た。

名簿を持つ手に汗がにじむ。

大きく深呼吸をし、

重い扉を開けた。

予想通り、真面目に座ってるやつがない。

いや・・・一人いた。

早速、教壇に上がり、

名簿を開いた。

そして、それぞれの席に座ってる人の名前が書かれたページを開く。

最初は自己紹介をしてもらおうと思ったが、嫌なやつもいるだろうと思い、やめた。そこらへんはきちんと考えてある。

ええと・・・まずは男子からいくか。

あの大人しく座ってた子は・・・
中山か。弱々しい顔をしてるな・・・。

次は・・・あの赤い髪を後ろで結んでる子だ。
高畑。明らかにヤンキーっぽいな。

・・・あのブツブツ言ってる黒いマントのやつが、
蓮城だな。髪が異様に長いな・・・
その髪のせいで、顔が隠れててよく見えない。

髪がピンピンはねてるやつは、
瀬川。なんか、明るそうだな。

・・・そして、今起きたのが、
東野だな。髪を七・三か、八・二くらいで分けていて、
その七か八で、右目が隠れてる。
クールそうな顔だな。

よし、男子は終わり。
えーと・・・女子は、

セミロングの子は、
栗原。その隣で一緒に話してる
ツインテールの子は・・・

立花。

そして最後に、有間。

髪を真ん中で分け、左にピンで

×にしたのを2つとめている。

髪の先が少しふわふわとしてる。

パタンと名簿を閉じた。

あらためて、全体を見渡す。

すると大半の生徒は、

さつきから名簿と生徒の顔を見比べるだけで

何も言わないオレを、怪訝そうな目で見ている。

そろそろ何か言ったほうがいいな。

「えー、今日からF組の担任となりました、

藤田晴彦です。これか」「先生ー！質問していいですかー？」

「・・・はい？」

なんだ？人が話してる最中に・・・

ええと、栗原か。

「あ・・・ああ、どうぞ。」

イラつときたが、ここでヘマをするわけにはいかない。

なるべく笑って言った。

「教師になる前に

何かやってた事ってありますかー？」

そんな事聞いて、一体何になるんだ？

・・・まあ、いいや。

素直に答えとこう。

「一応、家庭教師をやっていました。が？」

それを聞いた栗原は、すかさず
隣の・・・立花と何かを話していた。

「家庭教師って、なんか響き
エロくない？」

「あゝ・・・わかるわかる！！」

ヒソヒソ話してるつもりなのだろうが、
まる聞こえだ。

ため息をつきたいのをおさえ、

「ああ、でも女子は一度も
担当した事がないですよ。」

無論、本当の事だ。

「ええっ！？じゃあ、男子に
手、出したんですかっ！？」

「おい、なんで手、出した事

前提なんだよ!？」

あ、しまった。つい口に出してしまった。
ヤバい、何を言われる？

だが、栗原の返しは意外なものだった。

「あははははっ!!先生、見かけによらず
ツツコミ上手いんですね!」

驚いた。

そして、なぜか気持ちが
楽になった。

そして、気づいた。

オレは恐かったのだ。

周りの教師仲間の哀れみの目に
気づいたときから、恐かったのだ。

すると、立花がもつと意外な事を言う。

「先生ー、楓は先生が浮かない顔
してるのに気づいて、わざと
すごい事言っただんですよー。」

「あっ・・・祐美、ちよつとっ!!
言わないでよー。」

自分より年下の、しかも
生徒に氣を使われたのは

恥ずかしかったが、なぜか嫌ではなかった。

「でも・・・なんで前やっていた事なんて聞いたんだ？他にもいろいろあるだろ？」

「あーそれは、先生が家庭教師だったこと知ってたからですよー。ほら、あるじゃないですか！イケメンな家庭教師の男の先生と男子生徒の禁断の愛っ！！」

「え、・・・あ、ああ・・・？」

「とにかく、私たちには気を使わず、どんどんツツこんで下さい！その鋭いセンスでっ！！」

「・・・ああ。ありがとう。」

オレはこの時、栗原の腐女子発言ばかりに気をとられ、気づかなかった。

一体、栗原はどこでオレが家庭教師をやっていたという情報を手に入れたのかということに・・・。

5話 それぞれの想い (1) 〵 拓目線 〵 (前書き)

なかなか更新できなかった分、
たくさん更新!!

5話 それぞれの想い (1) ー 拓目線 ー

オレは、美留がオレの想いに気づいてる、
という事に気づいている。

そしてもう一つ。

オレが美留の想いに気づいてる
ということに、美留は気づいているだろう。

少々ややこしくなったが、

簡単に言つと、美留とオレは
お互いの好きな人に気づいてるということだ。

オレは、ずっと前からアイツが好きだった。

そして、中3の終わりに告白された。

オレも好きだったと言った。

だが、付き合いはしなかった。

なぜならアイツの告白は、

ずっと好きだったオレをさっぱり諦めるための、
告白だったからだ。

アイツは一度決めた事は曲げない。

だから、両思いだったけれど、

付き合いはしない。

そう、それで諦めるハズだった。

だが、オレはいまだに諦め切れなかった。
学校ではクールぶっているが、本当は
独占欲が強く、目的のためなら手段を選ばない。

だから、その時の別れ際に
わざわざ相手の心に残るような事をした。

そう・・・本当のオレは、すごく卑怯なのだ。

心に残るようなことをすれば、
いつか相手がもう一度オレを見てくれるようになるかもしれない
と・・・

だからオレはアイツに・・・
キスしたんだ。
相手は驚き、逃げてしまった。

いや、相手が逃げてなかったら、
絶対にそれ以上のこともしていたと思う。

・・・オレは寝たフリをして、美留のほうを見た。
いつもの様に、寄って来る動物を可愛がってる。

そして、思った。

ああ、オレは歪んでいるな、と。
オレは一瞬、ほんの一瞬だけ、
美留がいなければ・・・と、思ってしまったんだ・・・。

6話 それぞれの想い (2) 〱 蒼目線 〱

「蒼くんっ！この前の話、
少しは考えてくれた？」

新しい先生が来たHRも終わり、
気づいたら、もうそろそろ帰る時間になっていた。

「あ……えつと……

……ごめん。やっぱり無理かな……

他の人をあたってみて。有間さん「アリスっ！！」

「あ……そうだった……

あ、アリス……」

あだ名とか使い慣れてないので、戸惑う。
絶対あだ名で呼んで、と言われてるが、
やっぱり時々、名字に『さん』付けて
呼んでしまう。

「他の人っていつでもさあ……
マッドハッターにピッタリ当てはまるのは、
蒼くんしかいないんだよ……」

僕は今、有間さ……じゃなくて、
アリスに仲間になってほしいと言われている。

実は、アリス、ウサ、チシャで

『不思議の3人組』と呼ばれているのだが、その4人目のマッドハッターとして、僕を仲間に入れるつもりらしいのだ。

「ねーねー、どうして仲間になってくれないのー？
どうしたら仲間になってくれるのー？」

「えゝゝゝいやゝゝゝ
どうしたらって言われてもゝゝゝ」

すると有mゝゝゝじゃなくて、アリスは少し考えこみ、そして思いついたようににつこり笑い、

「じゃあさ、蒼くんで好きな人いる？」

「ゝゝゝえっ！？」

いきなりの質問に、思わず大きな声を上げてしまった。

「もしいたら、その人と蒼くんを
応援してあげるから！たとえば、
二人つきりにさせたりとか、その子の好みのタイプを
聞き出して教えたりとかゝゝゝ掩護射撃、
たくさんするよっ！！」

「で、でも、僕の好きな人はゝゝゝ」

その時、ひょこつとウサが現れた。

「アリス・・・お前さあ・・・

アリスが掩護射撃なんてしたら、
ますます仲が悪くなるだけだろ？

アリスは不器用だから・・・」

「なあっ！？ウサ、

ヒドいっ～～！！」

ウサが来たことで、ますます言いにくなつた僕は、
二人とも言い合っていて、僕から注意が
それてるのをいい事に、こっそりと逃げた。

僕は、いつになつたらこの気持ちを言えるのかな
と、ため息をつき、二人にバレないうちに
走って逃げ帰った。

7話 それぞれの想い (3) 〱 亮太目線〱

「はああ・・・アリスって怒ると
言うコトがヒドくなってくるよな・・・」

やっとの思いで言い合いが終わり、
帰ることにした。

すると、前にチシヤを見つけた。
よし、驚かそうと、こっそりと忍び寄っていく。

「チーシャ！！一緒に帰ろー！」

「うわっ・・・！？亮太！？」

いきなり後ろからとびついたオレに、
そうとう驚いているようだ。

「亮太・・・心臓に悪いから
やめてくれ・・・」

「えー、いつものコトじゃん！
こんなコトで心臓に悪いなら、
今頃チシヤは死んじゃってるよ！」

「さらっと不吉なコトを
言うな・・・」

それより亮太、そろそろ離してくれないか？

歩けない。」

しぶしぶオレはチシャを離す。

すると、チシャがキヨロキヨロとし、

「あれ・・・美留は？」

いつもなら一緒なのにとチシャがつぶやく。

「っ・・・なんでアリスのコトなんて気にすんだよっ・・・」

「・・・？美留とまたケンカしたのか？」

「んー・・・まあ、そうなんだけど・・・」

『？』と、チシャが首をかしげる。

はあ、とオレはため息をつき、

「アリス、言いすぎなんだよー！！

ちよつと意地悪言ったくらいで、二倍ぐらいにして返すんだよ！？」

『豆腐の角に頭ぶつけて死ねー！』とか・・・」

「なんか、美留の返しが微妙だな・・・」

「だよなあ！？豆腐の角は柔らかいから、ぶつけても死なねーよな！！」

「イヤ・・・そっちじゃない。」

チシャの言ってるコトがわかんないオレは、
ただただ首をかしげる。

すると、いきなりチシャがオレの
そでをぐいつと引っぱる。

「オラ、帰るぞ！学生は家に帰って
勉強するべきだろ？」

「チシャ・・・真面目。」

「いやいや、普通だろ。ここは名門校なんだから、
一応、F組でも勉強は世間に比べりや
できるほうだろ？ただ頭が悪いだけだ。」

「・・・それはフォローのつもり？」

だが、チシャはただオレを見て、
につこりと微笑んだだけだった。

チシャはめったに笑わない。
笑ってと言われ、笑っても、
笑い方が怖いと言われる。

でも、時々『微笑み』を見せるコトがある。
『微笑み』は、自然に笑ったときだけだ。

微笑んだときのチシャは、
同一人物とは思えないくらいにまぶしい。

ものすごくカッコ良くて、男のオレでも少し驚くほどだ。

それを見た女子に告られてた時もあった。

だが、あっさりと断った。当たり前だ。

チシャは今、好きな人がいるからだ。

オレは、恐らくアリスだろうと思ってる。

なんだか、よくアリスのほうを見てる様な
気がするのだ。

そして、きつとアリスもチシャが好きだろう。

二人は両思いなのだ。

実は、オレにも好きな人がいる。けど……

好きになっ**て**はいけない人を好きになっ**て**しまった。

この気持ちを告**い**つたらきつと、

嫌がられ、軽蔑されるだろう。

だけど……想うだけなら、

いいよな……？

どうか、オレがキミを好きでいることを

許してください。

8話 楓の正体？ 　　↓ 祐美目線 ↓

「おはよー・・・。」

「あ、祐美！

おはよー！！」

ひらひらと楓が

手を振る。

もう片方の手には

ゲームを持っている。

「あれ、楓、新しいゲームでも買ったの？どんなのー？」

「えーもちろん

BLゲームだよー

やってみる？」

「うん！

ありがとうー。」

朝っぱらからBLゲームをやる

女子高校生はなかないだろう。

しばらく黙々とやってから、

私は口を開いた。

「てゅーかこのゲームさ、
主人公に言い寄ってくる
男が10人もいるとか
どんだけー！？まさに
ハーレムjy・・・」

私ははっとして
言葉を切った。

「どしたの？祐美？」

「そーいえばさ、男一人に
言い寄ってくる男がたくさんて、
何ていうのかな？」

「あゝ・・・確かに。
男一人に女の人たくさんは
『ハーレム』だし、女一人に
男の人たくさんは『逆ハーレム』
だけだね・・・」

「性別の壁超えちゃってるからなあ・・・
どーなんだろー？」

そして、私はまた
思いつき、言う。

「そーいえば楓、
チシャとアリスって絶対

両思いだよねっ!!」

「え・・・チシャとアリス？」

「うん！あと、ウサも絶対にアリスのコト好きだよね!!」

「・・・・・・・・。」

楓は黙り込んでしまった。

「あれ・・・違うの？」

「おかしいなー。楓なら

知ってると思ったのに。だって、

楓は——・・・」

その時、ガラツとドアが開いた。

「おはよー。楓ちゃん、祐美ちゃん。」

「はよー!!」

「・・・おはよ。」

ずいぶん温度差の激しいあいさつと共に、アリスとウサとチシャが来た。うっかり言いそうになって内心ドキドキしながらも私たちも返事をする。

「あ・・・おはよ。」

「おはよー。」

そしてその時、またドアが開いた。
だが、クラスの人ではなく、
スーツ姿のおじさんだった。
手にはスーツケースを持ってる。
スーツケースの中身はお金だろう。
それも、そうとうな額の。

お、来た来たと、私と楓は
顔を見合わせる。

楓はすかさず、アリスとウサとチシャの
注意を私とおじさんからそらすため、3人と
話し始める。

そして注意がそれた隙に、
私はおじさんの所へと向かう。

「あなたがこの前連絡をくださった
雪田さんですね？
私が栗原 楓です。」

すると相手は驚いたように、

「指定した場所が
学校だったからまさかとは
思いましたけど・・・高校生

だったんですね・・・。」

「ええ。高校生は忙しいので、学校に言ってる時に来てもらうしかなくて・・・。」

そして私はポケットから小さな巾着袋を取り出し、中から『雪田さん』と書かれたラベルが貼ってあるUSBメモリを数あるUSBメモリの中から取り出し、渡す。

「ハイ、これです。」

「ああ、じゃあこれが一千万です。」

今回は一千万かあと思いつつ、一千万の入ったスーツケースを受け取る。

「そういえば・・・」

他の生徒や先生に気づかれたりしないのですか？」

相手はひと目を気にするように、キョロキョロしながら言った。

「ああ・・・それなら大丈夫です。ここは他のクラスの生徒や先生などは近づきませんし、ウチのクラスの人なら、私の仲間の祐美が引きつけといてますから。」

ちらつと楓を見ながら言う。

「でも、ごめんなさい。こんな所で取引なんて・・・でも、今は警察もバカじゃないですから、コソコソするとバレるんですよー。だったらあえて堂々としたほうがいいんじゃないかと思ひまして。学校、簡単に入れたでしょう？」

私はにこにこしながら言う。

「あ・・・そういえば、ですね。」

「まあ、私が裏から手を回せば簡単ですよ。この学校は私の手の中ですから。」

「え・・・あ、じゃあ、失礼します。」

まだににこにこしている私にゾツとしたように、相手は逃げるように帰った。

そして私は楓の所へ行った。

「楓ー！！また、だよ。」

スーッケースを持ち上げながら、言う。

「あー、もしかしてまた楓ん家の

使用人？楓、忘れ物多いねー。」

アリスはすっかり前に行った
ウソを信じ、笑いながら言う。

「うん、多分そうー。ありがとう、
祐美！いつもいつも。」

アリスも含め、他の人たちには
使用人が楓に忘れ物を
届けに来た、というコトに毎回してる。

「ううん、いいよ。みんな毎回
私が楓だと思ってて、おもしろいし。」

こそつと楓に言う。

「だよね・・・バカだよねえー
人って。」

くすくすと楓が笑う。

こういう時だけ、楓は
人格が変わったように
顔つきが変わり、
もう一つの楓の顔が
現れる。

そんな楓にゾツとしながらも、
私は楓にあこがれる。

楓の正体を見破れないなんて、
人ってホントにバカなのかも、と
思いつつ、楓に
スイーツを渡した。

9話 今日の議論 ―英斗目線―

「はよー・・・」

「お！来た来た！」

朝、教室に入るなり、
楓と祐美がオレの所へ来る。

手にはいくつかのライトノベルを
持っていて、当然、表紙は
男二人がイチャイチャ（？）している
イラストだった。

「何？オレに何か用？」

嫌な予感がして
冷たく言い放った。

「いやー・・・あのね・・・
実は、このライトノベルの
攻め役の男を英斗くん
演じてもらえた」絶対イヤ。」

きつぱりと断ったオレに、
悲しそうな目をした二人の
視線が注ぎ込まれる。

その圧力にオレは
耐えられなくなった。

「あゝゝゝ・・・
わかったよ！！やれば
いいんだろ？やれば！」

「わー！！やったあゝ！ありがとゝ！」

「じゃ、早速やつてもらおうか！えーと・・・
じゃあ、まず相手をキスしながら
壁に追いつめるシーンから！！」

「いやいやいや、いきなりそれは
ムリだろ。絶対ムリ。」

「え、なんで？」

本当に不思議そうな二人。
しかも、またいつもの様にハモってる。

「いや、でもさあ、相手の受け役の人を
見たら、やりたいと思うよ？」

「うんうん、絶対に
やりたいと思うよ！！」

なんか、カタカナが聞こえた気がするんですけど・・・

「はあ？相手もいんの？誰？」

そんな話、聞いてない。

それに、この二人の事だから
相手は男だろう。

という事は……

「じゃじゃーん！！なんと、愛^{いと}しの
実六くんであーす！」

・・・やはり。

あの腰抜け野郎だ。

「愛^{いと}しのつて言葉、撤回しろ。」

「え？イヤだ〜」それより、
早速、二人で演じてみてよ！」

「コイツとは絶対嫌だ。」

「え、じゃあ誰がいいの？」

どこかで聞いたよーなセリフ・・・

だから、そーゆー問題じゃねーんだよ・・・
アホか？コイツら。

学習機能ないのか？

すると、祐美が思いついた様に、

「んー・・・じゃーさ、
今日のウチらの議論に
付き合ってくれたらいーよ？」

「お、祐美、ナイスアイデア!!」

楓が人差し指をたてる。

議論？

それならいーかも・・・

「じゃあ、議論に参加する。それで
いーだろ？」

「じゃ、じゃあ・・・僕も参加で・・・」

さっきまで黙って見てた腰抜けが、
か細い声で言う。

「よし！決つまりいー！じゃあ、
今日の議論のお題は——・・・」

楓がノートにペンでさらさらと
素早く、丁寧になにかを書く。

「これでーす！」

楓がそう言って見せた
ノートには、

『ウチのクラスの男子のCPは!?!』

と、書いてある。

CPシーピーって・・・なんだ？

「おおー！いいね、いいねえ！

まあ、1つは決まってるけどー」

祐美が嬉しそうな顔をする。

祐美は意味がわかってるようだ。

とりあえず、聞いてみよう。

「なあ、あのさあ・・・

CPシーピーって、な」「まず1つは英斗さんと実六くんだよね！」

・・・は？

オレと腰抜け？

ちよつと待て！マジで、CPシーピーって

どーいう意味！？

オレとアイツの名前を並べられただけで
イラツとくる。

「ちょ！楓、祐美！

マジで、CPシーピーってな」「んで問題はさー、

ウサとチシャと蒼くんだよね・・・」

人の話を聞け！！

しょうがないから、二人の話が
落ち着くまで待つてることにした。

つか、議論なのに、オレが喋らせてもらえないなんて・・・

もはや議論でも何でもねーだろ。コレ。

だが、そんなの考えてないみたいで、祐美が楓と話し始める。

「やっぱさ、ウサとチシャっしょ！」

「まあ・・・確かに。でも、受けと攻めは？」

祐美の意見に楓がそれに対する言葉と次の疑問を言う。

ちゃんと議論にはなってるようだ。

まあ、他の人のことは考えてないみたいだが。

「うーん・・・攻めはウサでしょ。だって、行動力とかあるしいー。」

「んー・・・でも、チシャの性格が・・・」

そう言っただけで楓がくるっとこちらを向く。

「ねえ・・・英斗くん。チシャの性格、言ってみて？」

「・・・はっ!？」

いきなり声をかけられ、少し驚く。

楓はニコニコとこちらを見ている。

オレは少し違和感を感じた。

なんか、いつもの楓じゃないよーな・・・

だが、オレが瞬きをした間に

楓の表情はいつもの様に戻っていた。

「チシャの性格・・・? そりゃあ、

冷静で落ち着いてて、クールで・・・とか?」

そしてオレは楓の表情を見て、

一瞬ドキリとした。

楓は無表情だった。

でも、嘲笑ってるようにも、

悲しそうにも見えた。

だが、やはり無表情だった。

「・・・・・・・・大外れ。」

「え?」

楓が何かボソリと言ったような気がしたが、よく聞こえなかった。

「ま、いーや。じゃあ、蒼くんは?」

「蒼くんは藤田先生とくつつけちゃって

禁断の恋つてのもいいけど・・・

蒼くんて髪が長くて女に見えるから

女装させて男の娘にしちゃうのもよくない？」

「あゝ・・・でも、

男の娘にするなら、

実六くんが一番いいんじゃない？」

向こうはまた盛り上がり始めて、

オレは結局逃げた。

それを見た腰抜けは

自分も・・・と、席へ戻る。

はあとオレはため息をつき、

「CPシーピーって・・・結局何なんだよ・・・」

その時、目の前に誰かが

ひょこつと現れた。

その人は髪が長くて、すごく、

容姿端麗と眉目秀麗という言葉が合いそうな・・・

男子だった。

あれ、こんなイケメン、ウチのクラスにいたっけ？と、

首をかしげると、

「CPシーピーってのは、カップリングのコトですよ」

とだけ言った。

あれ？この声・・・

蓮城・・・蒼？

キャラ変わってる——！！？？

よく見ると、長い前髪を

横へどかしてる。

前髪のせいで顔を見たことが

なかったけど・・・

あんなにイケメンだったとは。

周りの女子がほっとかなそうだな。

なんでキャラが変わってるのか

気になったが、二人の女子に

振り回された疲れと、

眠気がオレを襲い、オレはフラフラと

席へ戻り、机につつ伏せ、

寝始めた。

10話 幽霊事件 (1) 美留目線

「え〜と・・・これは
どういうコト？」

目の前にいる
みめ麗しい人に、
私は問いかける。

「えっと、だからですね、
私はこの男の人に取り付いた
幽霊なんです。私を成仏させるために、
私を自分に取り付かせたんです。」

「あ・・・ああ・・・そういうコトかあ・・・」
そうは言ってみたものの、
いまいち腑に落ちない。

「それで、何をしたら、
成仏するの？」

成仏しない霊には、
この世にまだ未練がある。
というコトは、その未練を晴らしたいハズだ。

「えと、実は私・・・」

一度、男の人とキスをしたいんです・・・」

「え？あ、ああ・・・」

やっぱりこの人は女の人だ。

見た目が男なので、なかなか女と信じられなかったのだが。

それに、この人は、若いうちに死んだのだろう。

長く生きてれば、一回ぐらいは誰でもキスを経験するし、

口調からしても、若い女の人を感じた。

「いや、でもウチのクラスには

特別かつこいい人は・・・

あなたが今、取り付いてる人しかいませんよ？」

「いえいえ！別にどんな人でも

いいんです！ただ、男の人と一度キスがしたいだけで・・・」

ふーん・・・そういうもんなんだ。

「あ、じゃあ、ウチのクラスには、

実六くんと英斗くんとウサと

チシャと・・・先生がいますけど、

誰にします？・・・あ、というより、外に出て探します？」

男子を一人ずつ

悪いコトだが指差しながら、言う。

「あ・・・外はちよつと・・・
何て言うんですか？」

「え・・・フツに、
して下さいって・・・」

「いやいやいや・・・
変質者!？」

「じゃあ、このクラスの人しか
ないですよ？」

一体、誰にするんだろ？

「え・・・じゃあ、ウサ・・・さんで？」

「えっ!!??？」

思わず大声を上げてしまった。

「あ・・・ダメ・・・とか？」

おずおずと申し訳なさそうに
聞いてくる。

「いや!ダメとかじゃないんだけど・・・」

ちらつとウサの方を見る。

え、オレ！？という顔をしている。

そしてその霊は、どんどん

ウサに近づいていく。

ウサは固まっついて、

動けないみたいだ。

そして、私の横にはいつの間にか、

楓ちゃんと祐美ちゃんが

デジカメとビデオカメラを持って

目を輝かせてる。

まあ、中は女の人だけど、

見た目が男だからな・・・

そして、固まってるウサに

おかまいなしに近づく霊。

ちよちよちよつと・・・！

ウサが嫌がつてんじゃん！！

唇が重なりそうな、

その時。

「・・・やめとけ。」

見ると、チシヤが霊の腕を
引っ張って引き離している。

「・・・ちよつと、何すんの？」

私の邪魔、してもいいーと思つてんの？」

「お前じゃない。相手^{ウサ}を

よく見るよ。嫌がつてんのに
無理やりすんのか？」

「でも、私を成仏させるのが、
最優先・・・・・・・・」

霊がいきなりしゃべるのをやめる。
そして、また口を開く。

「・・・いいわ。じゃあ、

あなたにするわ。ちよつと来て。」

ぐいぐいとチシャの腕を
引っ張りながら、霊はさつさと
教室から出て行つてしまった。

ウサはまだ、ぽかんと口を開けたまま、
つつ立っている。

とにかく、ウサに何もなくて
良かったと、私は一安心した。
それと同時に、自分とチシャへの
憎悪が、じわじわと
わいて来ていた・・・・・・・・

11話 幽霊事件 (2) 〱 拓目線 〱

「オレにする、なんて
ウソだろ？目が本気じゃなかった。」

「鋭いのね。あなた。」

「それはどーも。で、何の用？」

自分にすると云った事は嘘だと
わかったが、どうしてわざわざ
人気ひとけのない所まで連れて来たのか
まではわからなかった。

「いや・・・その、あくまで私の
推測なんだけど・・・」

相手はキョロキョロして、周りに
人がいない事を確認し、

「ちょ・・・耳、かして。」

オレは素直に従った。
すると相手はオレの耳もとで
コソコソとありえない事を言った。

オレはバレている事に驚き、
思わず後ずさる。

すると相手はにこつと笑って、

「あ、言わないから。そーいう
悪シユミ、無いし。」

「・・・なんでわかった？」

「いや・・・見てわかるし。」

オレはそんなにわかりやすいヤツ
だったのかと、少し悲しくなる。

「まあ別に誰にも言わないけどさあ、
あの子を責めるようなコトは
しないであげてよね。」

「・・・あの子？」

何の事だ？
てか、誰の事？

「アリス・・・だっけ？のコトよ。」

「え・・・美留？それって、
もしかして・・・」

「そ。アリスちゃん、自分をかなり
責めてるわよ。あのまま自分を責め続けてたら、
最悪、自殺するわよ？アリスちゃん。」

・・・やはりな。

だが、美留には死んでほしくないと思う反面、
とつとと自殺すればいいのに、と思ってる
自分がいる。

「でも、結局報われないのはアリスちゃんの方なんだからね？」

「は？それってどーいう意味？」

「あんた、男だからそーゆーの鈍いからわかんないんでしょーけど、女には大体わかんだよな。女のカンっての？」

何の事を言ってるのかは
大体わかるが、誰の事を言ってるかまでは
わからない。

オレは聞こうと思って
口を開きかけた時、相手が
察した様にしゃべり始めた。

「あ、ゴメン。詳しくは言えないなー
私は女だから、女の子の方の味方をするし？
でも、まあそのうちわかるから。」

「あ・・・ああ・・・？」

ワケわかんないなあ・・・

すると相手が少し
深刻な顔つきで、

「そーいえば、あの、セミロングの女の子って、何者なの？」

「え・・・楓の事？別に、

ちよい重症な腐女子ってとこ以外は

あまり特徴のない、普通の女子高校生だけど・・・」

何でそんな事聞くんのだ？

すると、相手は考え込んでから、

「あの人には気をつけたほうが

いいと思うよ。そのうち、大変なコトに
なるかもしれないから。」

「え・・・？何で・・・？」

「ま、いや！あと最後に、

あんたの想いに免じて、
成仏してあげるから！」

「えっ！？ちょっと!!」

すると霊はにっこりと笑い、

その瞬間、蒼は倒れた。

そして、しばらくして、蒼は起き上がった。

「あ・・・成仏、したんだ・・・」

蒼は前髪を元のように
前に戻す。

「なあ・・・蒼。」

「・・・何？」

「霊って、人の心とか
読めんのか？」

「ん・・・いや・・・
それはわからない・・・」

「・・・そうか。わかった。」

やはり、あの霊はオレの気持ちを
勘で読み取ったのか・・・？

ていうかあの霊、
キスしたかった筈なのに、
自分から成仏した・・・
てか、自分から成仏ってできるんだな。

蒼がフラフラと歩き始めた。

「おい・・・大丈夫か！？肩、
貸してやろうか？」

「ん・・・そうしてもらえると・・・
助かる・・・」

蒼って、何気に偉いよな。

自分がフラフラになつてでも

霊を成仏させてあげんだもん・・・

「あ・・・あのさ、チシャ・・・

前から聞きたかったんだけど・・・」

「何だ？」

蒼は少し躊躇ってから、

決心した様に

オレの目を真っ直ぐに見て、

「チシャって・・・

好きな人、いるの？」

「はあっ！！??」

あまりの驚きに、つい

ガラにもない大声を上げてしまう。

「ななな何で・・・？」

「いや、何となく・・・」

やっぱり、オレってそんなにわかりやすいヤツ!?

「だ、誰のことを好きだと思ってるの？」

「え・・・あ・・・アリス・・・？」

「いやいやいや！ない！！」

「なんでそこまで

否定するの・・・？」

何なんだよ・・・コイツ・・・

つか、オレ、キャラ崩壊

してんじゃない・・・

「いや、だって

美留じゃないし・・・」

「ふーん・・・じゃあ、他の人なんだ・・・」

「え！いや！！」

ヤバっ・・・つい・・・

「誰なの・・・？中山くん？高畑くん？
ウサ？楓ちゃん？祐美ちゃん？」

「何故男子がいる・・・」

「いや・・・だって、ノンケとは

限んないし・・・」

なんでそんな言葉、知ってんだよ・・・
つか、使い方、間違ってるし。

「あ・・・まさか、僕はないよね・・・」

「アホか・・・たえ天変地異が起ころうが、
オレは男は好きにならない。」

オレは、もう答えるのも面倒になり、
肩を貸しながら、教室まで歩くまでの間、
向こうが他に色々聞いてきても
何も答えなかった。

「あ~~~~っ!! 蒼くん!!
心配したよ・・・」

教室に入るなり、美留が
蒼にかけ寄る。

「オイ・・・オレはどーした
オレは。」

「え?どーセキスされなかったんでしょ?」

「何故わかる・・・!」

「いやいや・・・
何となくだから。」

横で、心配かけてごめんなさい、と
あやまる蒼を見て、オレは蒼に、
ごめんな・・・と心の中であやまった。

オレは、蒼にさつき、嘘を
ついてしまった。

蒼は気づいてないみたいだが・・・

蒼は誰が好きかわかりやすいな
と、思いつつ、オレは素直な
蒼を羨ましく思った。

12話 前兆 〱 実六目線〱

「そーいえば、みんなって、何年留年してんの？」

「あ、それ私も思った！ウチと楓は確か・・・二年だったよね？」

栗原さんの突然の問いかけに、素早く対応する立花さん。

普通はこんな質問されたら

面食らっちゃって、すぐに何か言えないけどなあ・・・
やっぱり二人って仲が良いんだな。

息、ピッタリだし。

「うーんとね・・・私とウサとチシャと・・・蒼くんは、確か一年だけだったよね？」

アリスの問いかけに、ウサとチシャと蒼くんはこくこくとうなずく。

「オレは確か・・・二年だったぜ？」

「あ・・・僕も、確か二年だったと・・・」

高畑くんに続き、僕が答える。

「あ、そか、英斗くと実六くんも二年だった。同じだったね。」

忘れてた、と栗原さんが言う。

ていうか・・・何か高畑くんがめっちゃこつち睨んでるんですケド・・・

何で？何で！？

何か悪いことしたっけ・・・

すると、高畑くんが決めたように栗原さんに話しかける。

「あのさあ・・・オレと腰抜けの名前を今後一切、並べないで欲しいーんだけど。」

「え、何ソレ？

・・・あ、順番変えて欲しいの？
実六くんと英斗くん、にする？
そーすると英斗くんが受けになるけどいい？」

「ドアホ！！順番じゃねーよ！！
並べんなっつー、根本的な話！」

「ところでさー、実六くんて真面目なのに、どうして二年も留年してんだろーね？」

「華麗にスルーすんな。いつの間にスルースキル身に付けたんだよ。」

・・・そういえば確かに、
栗原さんの言う通りかもしれない。
・・・いや、決して真面目では
ないんだけど・・・
さすがに高校で二年も留年は
おかしいと思う。

大学なら、二年の留年もありえるけど・・・

「やはり・・・僕は真面目じゃないんですよ
きっと・・・」

「でもさ、こいつら女子二人よりは、
全然真面目じゃねーの？」

そう言ったのは、高畑くんだった。

「・・・え？」

少し、驚いた。高畑くんがそんな事
言うなんて・・・

すると女子二人はすかさず、

「英斗くんがデレたっ!!!」

まあ、確かにこの二人よりは・・・
いや、悪口は良くないよね。
うーん・・・でもなあ・・・

「で・・・でれたって、どっいう意味だよ?」

そう聞く英斗くんを無視して二人は、

「ハイッ! 英斗くんツンデレキャラ確定〜!」

「ツン9でデレーぐらいだよね!

まさに理想の割合っ!!!!」

「あゝあゝ・・・もう、めんどくせえ!

こいつら日本語が使えないのか!?!」

一応日本語だけど・・・

多分、そういう人の言葉使いなのかな・・・

結局、二人は盛り上がってきて、

何を言っているのか全くわからない僕達は、
さっさと席へ戻っていった。

僕は素直に二人の仲の良さを

とても羨ましく思う。

二人はいつも一緒に、登下校も、

学校でのお喋りも、いつも二人は一緒だ。

でも・・・何故だろう?

時々、二人の間に流れる空気が

ひどく冷たくて、張りつめた感じがする。

気のせい・・・なのだろうか?

そう思って二人の方を見ると、
楽しそうにキヤーキヤー話している。

やっぱり、気のせいかな・・・

あんなに二人は仲が良いんだし、
ケンカしてる所も見たことないし・・・
やっぱり、違うよね。うん。

こうして僕は二人から目を逸らした。
だから、この時僕は気づかなかった。

栗原さんの顔つきが

すつと変わり、カバンから一つの
液体の入った小瓶を取り出し、
その小瓶の正体を立花さんに話しながら、
これから面白い事が起こるから、と
怪しげな笑みで見つめてることに。

だが、この後知る事になる
真実と嘘は、あまりにも
残酷すぎた。

12話 前兆 〱実六目線〱（後書き）

やっと投稿する事が出来ました・・・；
遅くなつてすいません！

ちなみに私の好きなツンデレの割合は、
ツン8デレ2です。

・・・どーでもいいですね、はい。スイマセン。

13話 計画始動 (1) 〱 祐美目線〱

朝、ウサが登校してくるなり、
チシャに飛びつき、泣きそうな声で

「ててて転校するって、本当!!??」

「・・・はあ? 誰が?・・・オレが?」

ウサはただこくこくと首を縦に振る。

「いや・・・それ、勘違いだから。どーせ
誰かが流した根も葉もないウワサだろ。」

「あ・・・そうなの? 良かったあ・・・」

ホッとしたのか、嬉しそうに
チシャに抱きついている。

ちよつと興奮して、叫びそうになったけど、
楓から言われた事をちゃんと
実行しなくちゃ・・・!

チラッとアリスの方を見ると・・・
アリスの表情から、思惑通りにいった事が
十分わかった。

あとは・・・

アリスの方へ近寄っていき、
楓に言われた通りのセリフを言う。

「あの二人、本当に仲良しだねー・・・
友達には見えないくらいだよね！
まあ、私的にはオイシイけどっ」

そして私はアリスが何か言う前に、
その場から素早く立ち去った。

そして、ずっとパソコンをカタカタと
やっている楓に駆け寄る。
パソコンをやっている時の楓は、
人が変わったかのように
表情が全く違う。

だが、私以外の人が近づくと、
瞬時にいつもの表情に戻し、
何事も無かったかのように
にこにことする。

まあ、PCゲームやっている時とか
腐ってるものを見る時は、
ある意味表情が違うのだが。

「楓！うまくいったみたいだよ。」

「おー。」くろっさん。」

「それよりさ、チシャが転校って・・・

本当なの？」

「いやいや・・・違うって。本人もそう言ってたじゃん。あれはね、私が流した嘘のウワサなの。」

「え？何でそんな事するの？」

すると楓はうーんとうなり、

「まあ、そのうち分かるよ。言ったでしょ？これから面白いコトが起こるって・・・」

怪しげに笑う楓に、私は不安感を抱いていた。

一体、何をするのか、と。

誰かが傷付くような事はしたくない、というのが私の本心だ。

でも、その事を言ったら私は、楓に何をされるかわからない。

だが・・・思い切って、言ってみる事にした。

「ねえ・・・楓？それって、誰かが傷付いたりとか・・・しないよね？」

「・・・何言ってるの？」

傷付くに、決まってんじゃん。知ってるでしょ？

私はね、誰かが苦しむ所を見るのが、
すっごく大好きなの。苦しんで、苦しんで、
もう何もかも無くしたような光の無い目を
見る時が、私にとっての至福の時なの。」

楓があまりにも嬉しそうに話していたので、
私は大きな寒気がして、
あまりの大きさに吐き気がした。

やっぱり楓は怖い……
いや、恐いとかで片付けられる
恐さじゃない。言葉に出来ない恐さだ。

……やっぱり楓には関わっちゃいけない。
楓はいわゆる、敵に回しては
いけない存在なのだ。
でも、逃げる事は許されない。

……だが、次の瞬間、
私の口が勝手に動き、
言っではいけない事を言ってしまった。

「あ……あのさ、もうやめない？
だって、傷付いた人が可哀想じゃん……
その人には特に何の恨みも無いんだし……」

ハッとした時には、
もう遅かった。

楓の表情がスッと変わった。
ものすごく大きい威圧感を感じ、
私は全てを敵に回した様な
感覚に陥った。

とりあえず何とかしてごまかそうと
何か言おうとした時、
楓がゆっくりと口を開けた。

「ふーん・・・もしかして、私に逆らう気？
祐美はそこまでバカじゃないと思ってたんだけど・・・
逆らったらどうなるか・・・
一番知ってるのは、祐美でしょ？」

私は震えが止まらなかった。
泣きそうになって、周りの目を
気にして、必死でこらえた。

私は涙声になりながらも
ようやく声が出せた。

「お・・・お願い・・・
許してっ・・・！ごめんなさい・・・！！」

「・・・許さない。」

その言葉は刃の様に私の心に
突き刺さった。

だが、いきなり楓は
にこつと笑い、

「・・・と、言いたい所だけど、
祐美はよく私のために働いてくれるし、
使えるから、やめとくなっ!!」

「え・・・あ、本当・・・?」

すると楓は笑顔のままで、

「まあ、次は無いけどねっ♪」

その言葉に少しゾツとしたが、
とりあえずホツとした。

その時、また寒気がした。

でも、楓の時の様な吐き気がする程の寒気ではない。

何だろうと見てみると、

それはアリスが放ってるものだった。

アリスがいつもとは違う。

とても冷たい目をして

何かを睨んでいる。

その目線の先には・・・

一瞬、私は、え?と思った。
どうして?どういう事?

何で・・・その人なの？

私は何が何だかわけが分からなかった。
でも、これはまだ始まりにすぎなかった。
まさかあんな事になるなんて・・・
楓以外は想像もしなかっただろう。

楓の恐ろしい計画が動き出した事に、
私はまだ、気づかずにいた。

14話 計画始動 (2) 〱 楓目線 〱

朝、私が思っていたより早く、二人は一緒に来ていた。

本当は何日か経ってから

一緒に来始めると思ってたんだけれど・・・
まあ、計画通りにいって良かった。

早くなっても悪い事は無いし。

私は驚いた様に振る舞って、

「あれ？二人だけが一緒に来るのって、
珍しいね。何かあったの？」

一緒に教室に入ってきた、
ウサとアリスに言う。

するとアリスは嬉しそうに、

「じ、実はね・・・私達、
付き合い始めたの！」

「えっ！？ウソ、まじい！？
すごーい！両想いだっただー・・・」

わざと驚いてみせたが、
これも計画通りだ。

二人が付き合い始めたから、
次にする事は……

こっからかなり大事なのだ。
上手くいくかどうか分らない。

っと……その前に、皆の反応を見なきゃ。
思った通り、二人が微妙な顔をしてる。

片方はあからさまに悲しそうな顔をしている。
でも、コイツは今回の計画において
あまり重要ではないからどーでもいい。

問題はもう一人の方。

あー……必死で感情を顔に出すのを
抑えていますねえ……
でもこっちは悲しみだけじゃなく、
憎しみ、恨みが混ざってるな……
うん。思った通りだ。

とりあえず次だ。

私は皆の関心がウサとアリスに向いているのを良いことに、
誰にも気づかれずに教室を出た。

あらかじめ指定しておいた
校舎の裏の影に行くと、
女の子が立っていた。

逃げ出すかなと思ってたんだけど……

ちょっと意外かも。

「ハイ、じゃあこれ。この手紙を、
ウサ・・・じゃなくて瀬川亮太の
下駄箱に入れてきて。そうしないと・・・
どうなるかは、わかってるよね？」

わざとにつこり笑って見せると、
相手は怖くなったのか、
手紙を握り締めて逃げるように
下駄箱の方へ走って行った。

「まあ、あの様子なら
そうそうへましないかな・・・」

多分、わざわざ監視するまでも無いだろう。
任せても大丈夫なはずだ。
それにあの子には、こういう時に使えるように、と
前々から脅しをさんざんかけといたから、
へましたり、裏切ったりしたらどうなるか
十分にわかっているはずだ。

教室に戻ると案の定、
祐美たちが心配そうに

「楓！どこ行ってたの？
急にいなくなったから心配したよ・・・」

「あ、ゴメン！ちょっとトイレ行ってて・・・」

戻ってくる時なら、バレても大丈夫。

私が手紙を女の子に渡しに行ってた時間は
トイレにしては長いけど、

行った時の時間がバレてなければ
怪しまれはしない。

仮に途中でいない事に気づいたとしても、

帰ってくるまでの時間など気にするより前に

皆で何処に行ったのだろうと検討し始めるだろう。

一分単位でこまめに時計を確認するようなヤツがいたら、
それは別だけど。

とりあえず、ウサが思い通りに動いてくれれば・・・
全て上手くいく。

放課後、私は祐美にバケツを渡した。

「え・・・何コレ？」

「バケツだけど？」

「いや・・・それは分かるけど・・・」

何のために？・・・あ、何かすればいいの？」

さすが祐美。

よくわかってるじゃん。

「今からそのバケツに水を入れて

二年の校舎の三階の

二年C組の前の窓から

4時29分ぐらいに水を落として。」

「え・・・どうしてそんな事・・・」

「いーから。4時29分ぐらいになれば、
ちょうどウサが来るハズだから、
ウサめがけてきちんと水をかけるように。」

「えっ！？ウサに？」

「そんな事したら風邪引くんじゃ・・・」

「うん。風邪引いてもらわなくちゃ
困るし。そのためにやるんだから。」

祐美は困った顔をしている。
そんな事は出来ない、と思ってるのだろう。
でも・・・最終的には
実行するはずだ。

祐美にはもう、後が無いのだから。

すると祐美は少しハツとした様に、

「もしかして・・・それってウサとアリスが
付き合い始めた事に何か関係あるの？」

ふーん・・・案外鋭いじゃん。
まあ直接は関係無いけど、
大きな計画の一部という点では
関係がある。

「なんでもいーから、早く行つてきて！
早く行かないと本当にどうなるかわかんないよ？」

すると祐美はあせつた様に

バケツを持って二年の校舎の方へ走つて行つた。

・・・とりあえず、今日やる事はこれで終わり。
あとは明日、どうなっているか・・・

私はずいぶん前からつまらない事ばかりで、
とても退屈していた。

そんな時思いついたのが、
落ちこぼれクラスを作るという事。

おかげで今は退屈しない。

特に、ウサとチシャとアリスが来てからは
やはり、情報という物は人より役に立つ。

あの3人をこのクラスに來させたのも、
その情報を見たからだ。

それは実に興味深いもので、
私の好奇心を刺激させるものだった。

ただ、この情報はアリスは知らないだろう。

・・・まあ、そんな事はどーでもいいか。

私は、カバンから小瓶を取り出した。

今日やった事が成功すれば・・・

次はこれだ。

これも成功すれば、あとは放っておけば
そのうちに面白い事になる。

人の愛って、時には恐ろしいよなあ、と
思いつつ、私はカバンに瓶をしまった。

15話 蘇る想い　く亮太目線く

チシャの転校疑惑が晴れた日、

オレは放課後、アリスに呼び出された。

アリスは第三公園に来て、と言っていた。

第三公園はいつも人がいなくて、

周りも人通りがものすごく少ない。

どうしてこんな人気が無い所に

公園があるんだ？と思うくらいにだ。

おそらく、他人にはあまり聞かれたくない

話題なのだろうと思った。

オレは、何か悩み事とかの

相談かな？と思っていた。

でも、その予想は大きく外れた。

オレはアリスに脅された。

・・・いや、言い過ぎかもしれないけど。

でも、オレの好きな人をその人の前でバラす。

と言ってきた。

普通なら、そんなに焦りはしないだろう。

まあ、人によるかもだけど。

それに人には普通、好きな人のことよりも

もっと重大な秘密があるハズだ。

だが、好きな人はオレにとつては
バラされるとかなりキツイ。

バラされるくらいなら、死んだ方がいい。
と思うくらいに重要な事だ。

そして、オレは反射的に、

「何をすれば・・・秘密にしといてくれるんだ？」

こう言ってしまった。

するとアリスは、思いがけない事を言った。

「・・・私と付き合ってくれるなら、
秘密にしといてあげる。」

「・・・え？それって・・・」

その瞬間、アリスはオレに
抱きついてきた。

すると、泣きそうなか細い声で、

「私だって・・・こんな形で
言いたくなかったけど・・・！」

アリスは、オレの右頬に手をあて、
オレの左頬にそつと唇が触れるだけのキスをした。

驚きという感情がオレの顔に出る前に、

息をつくヒマも無くアリスは

「・・・好き。大好き。ウサの事が・・・
大好きだよ・・・」

小さいけれど、はつきりとした声だった。

オレはショックだった。

アリスの想いに気づくことが出来なかったからだ。

・・・アリスの気持ちは痛いほど分かる。

好きだけど、その気持ちを伝える事は出来ない。
この関係を壊したくないから。

でも、日に日に好きという気持ちはふくれ上がり、
やがて制御出来なくなり、

おだやかなアリスが人を脅すような事をする。

でも、それは本当に好きな人がいる時だけ。

・・・いや、好き、じゃなくて

愛している。それほど強い想いを持っている時だけ。

そんなに誰かを強く愛した事のある人は、数少ないだろう。

・・・オレも、アリスみたいに脅していたら、
好きな人と付き合えたのだろうか。

何だかそれは、違うような気がする・・・

そう思いながら、オレはアリスを抱きしめ返し、
一言、うん。とだけ言った。

その後の事は、あまりはつきりとは覚えていない。

次の日の朝、アリスが二人だけで学校に行こうと言ってきた。チシャは先に行ってしまったらしい。理由は分からないけど。

学校に着いて、アリスは皆の前で、自分たちが付き合い始めた事を言った。その時チシャの方をチラッと見てみた。無表情だった。というよりも、感情の読めない表情。

他の人は、複雑な顔をしていた。
・・・まあ、いきなりだからな。

その後は、オレは誰とも話さずに、ずっと机に突っ伏せていた。皆が具合が悪いのかと心配していたけど、気にしなかった。

放課後、アリスと一緒に帰ろうと言っていたのを断って、オレは一人でさっさと帰ることにした。
・・・すると、下駄箱に手紙が入っていた。
何だろうと思い、開けてみると、

『放課後の4：30に裏庭に来て下さい。』

最初はラブレターか何かかと思った。だが、そうにしては色気の無い、真っ白な手紙だ。封も、セロハンテープでしてある。

とりあえず行ってみる事にした。
裏庭に行く道は一つしかない。
ちょうどその道を通っている時だった。

上から大量の水が落ちてきて、
オレは全身びしょ濡れになってしまった。
急いで上を見たが、そこにはもう、
人の気配は無いようだった。

びゅうつと冷たい風が吹いてきて、
オレはくしゅん、と、くしゃみをした。
・・・このままでは風邪を引きそうだ。
待ち合わせのやつは多分、
水をかけるためのものだろう。

とりあえず、オレは急いで家へと帰った。
本当は、学校のシャワー室を借りるなり、
先生に言っただけに替えさせてもらったりしても良かったんだ
けど、

なんせオレは落ちこぼれクラスだから、
あまりクラスから出て普通のクラスの前など、
学校内をうろついていると、
他の人が悪口を言うてくることがあるから、やめた。

家に着いた頃には寒気までしていて、
これはちよつとヤバいな、と思った。
とりあえず急いで着替えて
シャワーを浴びて、ベッドにもぐりこんだ。

部屋はシーンとしていて、

聞こえるのは時計の針の音だけ。

オレは、一人暮らしにしては、やっぱりここは広すぎるなと思った。

親は、物心ついた時からもういなかった。

別に、寂しくなんてない。

親の事はこれっぽっちも覚えていないから、最初からいなかったかの様にも思える。

「は・・・はくしゅっ！」

さつきよりくしゃみが大きくなっている。

・・・これはもしかしたら、本当に風邪、引いちゃうかもな。

最初は浅い眠りを何度かくり返し、くり返していくうちに、深い眠りに落ちていった。

・・・昔の事を思い出していたからだろうか。

オレは、昔の頃の夢を見た。

幼稚園くらいの頃。

アイツと遊んでいる。

ようやく、オレは自分と理解し合える人を見つけたんだ。

その時だった。

いきなりパツと場面が変わり、

どこかの学校の教室の場面になった。

・・・この教室、もしかして？

忘れるハズのない、あまりにも見覚えのある、教室。

オレは人を待っている。

教室内をウロウロしながら、時々、机の上に座ったりして。

そしてその時、ゆっくりとスローモーションの様に、

教室の扉が開いてく。

そこには・・・。

その瞬間、オレはバツとベッドから飛び起きた。

「あ・・・そつか・・・夢か・・・。」

悪夢のようで、悪夢じゃないような、夢。

せつかく忘れかけていたのに、鮮明に蘇よみがえってしまった。

思い出しただけでオレは目が眩む程の

陶酔とうすい感を覚えた。

途端にオレはあの時の気持ちが蘇り、

ずっとふたをしていた気持ちがあふれ、止まらず、

それを表しているかの様に、涙があふれてきた。

オレはアイツの事が、好きだった。

いや・・・だったではない。

今も、アイツの事が、好きなんだ。

やっと、オレはハッキリと自覚した。

自分の、気持ちに。

今までも好きだったけど、

こんなに好きになっていた事に気づかなかった。

いや・・・好き、じゃない。
愛している。深く、深く。

こんなんじゃない明日、どうすれば良いのか分からない。
学校に行きたくない。そう思ったのは初めてだ。

・・・風邪、引かないかな。
今なら引けそうな気がする。
ちようど寒気がすごいし。

そんな事を思いながら、
またオレは眠りについた。

今度は、何の夢も見なかった。

15話 蘇る想いゝ亮太目線ゝ（後書き）

そういえば最近、藤田先生存在をすっかり忘れていた事に気づきました。

まあ、もともと影薄いキャラなんでね；

次回にでも出そうかな・・・なんて思っています。

16話 罽 藤田先生目線

「うん．．．うん．．．はい、
わかった。じゃあ、お大事に。」

そう言つて、オレは学校の電話を
元に戻した。

まさか、無遅刻、無欠席の
アイツが休むだなんて．．．
バカでも風邪は引くのか。
．．．生徒をバカだと思つてしまつた。
いや、でもこの成績じゃなあ．．．

アイツはクラスの中で一番、
頭が悪いと言つていい。

．．．だが、他の人は大抵
頭がとても良い。

とても落ちこぼれクラスに
入れられるような学力ではない。
栗原に至つては学校．．．いや、
この前、全国模試で一位をとつた程の
すごい学力の持ち主だ。
普通なら、特進に入れるほどだ。

これは明らかに、誰かが裏で
糸を引いているに違いない。

・・・一度、こんなセリフ、言ってみたいな。

オレは小さい頃は探偵とか刑事になりたかった。
まあ、ドラマとかアニメとかの影響だ。
だが実際大人になって、探偵はあのアニメみたいな事は
一切せず、失くし物を探したり、迷子の犬を探したり、
浮気調査だったり・・・

その事を知ったとき、オレは嘘だろうと思った。
まあ、本当だったけどな。

結局、教師になったけれど、
それだって公務員なら収入が安定していると思って、
なったんだ。大人になると、ますます色々なものに縛られ、
子供の頃はあんなに大人になりたいと思ったのに、
と、今さらながら思う。

最近ため息が多くなってきているなと思いつつ、
オレは、はー・・・と、長いため息をついて、
教室へ向かった。

「く・・・栗原・・・!？」

「あ、先生！おはようございます。」

教室のドアを開けると、そこには栗原が、
ぼつんと一人でいた。

「こんな早い時間に・・・
珍しいな。それに、一人なのか？
立花はどうしたんだ？」

「あー・・・ちょっと色々とありましてっ」

「そ、そうか。でも、どうしてこんな早い時間に？」

すると栗原はうーん・・・と唸って、

「ま、そんな事、いーじゃないですかっ！

それより、もしかして今日、ウサ休みだったりしません？」

「え・・・あ、確かに瀬川は休みだが・・・

何故それをお前が？」

オレだって、さっき知ったばかりなのに・・・

すると栗原はふふつと笑い、

「さあ？何故でしょーね。」

教えるつもりはさらっさら
無い様だ。

「まあ、いいか。とりあえずお前は、
皆が来るまで勉強でm「先生、もしかして疲れていませんか？」

「・・・は？オレが？」

人の話を遮おさへりってまで
何をいきなり言うんだコイツは・・・

「ええ、そうです。何か、すつごく
疲れている様に見えたもので・・・」

そう言われてみれば確かに、最近このクラスの事や
このクラスの事やこのクラスの事で悩んで、眠れなくて、
不眠症っぽくなっている。

「あ・・・ああ、そうだな。確かに
少し疲れ気味だな。最近は。」

「あつ！だったら・・・」

そう言つて栗原はカバンの中を
ガサガサとかき回し、
やがて、白い錠剤がいくつか入っている
透明な小袋を取り出し、
それをオレの前へとずいっと突き出した。

「・・・？ 何だこれは？何かの薬か？」

「ええつとですね、簡単に言うと、
疲れがすぐに取れる薬ですね。」

「何でそんな物を学校に・・・？」

怪しさをたっぷりだな。麻薬とかか？

すると栗原は、あわてた様に
首と手を横に振って、

「いやいやいや！普通の薬ですって！

怪しい物じゃありません。私、いつもパソコンを
たつくさん使ってるんで、めっちゃ疲れるんですよー．．．
んで、そーゆー時にこの薬を飲んでるんです。」

そういえば、栗原はいつも学校で
パソコンをカタカタとしている。

「ふーん．．．かなり効くのか？」

「あ、はい！それは保障出来ますね！！
．．．一粒、いかがですか？」

栗原はそう言つて、にこつと
女子高生っぽい、可愛らしい笑みをした。

それでも少しオレは躊躇^{ためら}っていた。が、
次の瞬間、栗原はその袋を開けて、
中の錠剤を一粒取って飲んだ。

「．．．これで私の事、信用しましたか？」

「は？．．．ああ、うん？信用つて？」

「いや．．．だから、先生って何か
私を信用してない様に見えたんで．．．」

「え？ああ、それは．．．っ」

と、オレは口をつぐんだ。

確かに、オレは栗原をあまり信用していない。
生徒で、しかも子供なのに、だ。

原因は、俺が初めて栗原に会った、
H Rの時だ。後から気づいたのだが、
栗原は、オレの過去を知っていた。

それはどう考えてもおかしい。
それに・・・栗原はどこか人を寄せ付けない
雰囲気をもっている。

何というか、こう・・・とにかく、
女子高校生が出す雰囲気ではないのだ。

すると、栗原は寂しそうに苦笑いして、

「やつぱりか・・・あ！いいんです！
こんなのに慣れっこなんで・・・」

「そんな事・・・無いけど。」

「・・・え？」

「信用、したよ。というより、
もともと信用してないとか無いしな。」

栗原があまりにも悲しそうな表情だったので、
つい、口に出てしまった言葉だった。

「え・・・あ、そうなんですか。良かったあ・・・」

栗原があまりに安心したような
笑顔を見せたので、

今さら言い直すのは出来ない気がした。

とりあえず、オレはその薬を一粒もらう事にした。
相手は高校生だし、毒を盛るとかそういう事は、
さすがにしないだろう。それに、
栗原もその錠剤を飲んだんだし。

すると、いきなり栗原が何か思い出したように、ポンと手を叩き、

「あーっ！そういうえば、先生！

何か 朝、気づいたんですけど、
裏庭の用具入れと化した
元温室のドアの窓ガラスが
割れてたんですよ。」

「え・・・！？それ、本当か？」

「はいー。マジです。」

不法侵入者が何かが学校に入り、
窓ガラスを割ったのだろうか。

「と、とりあえず、案内してくれ。」

「あ、はいっ！」

でも、一体どうしてだろうか。
ただのイタズラか？・・・いや、
それより前に、どうして栗原はそれに気づいた？
この教室までの道からは、裏庭なんて見えない。

裏庭は、人目の付かない学校の隅っこにぽつんとあって
放置状態のため、草が生い茂っている。
そんな草が生えっぱなしの所に、
女子高校生が進んで行くだろうか？

少し疑問だったが、
とりあえず栗原の案内されるがままに
裏庭の用具入れと化した温室に行った。

「うわ・・・草がすごいな。少しは
手入れをしろよ・・・ったく・・・」

「デスヨネーw」

そう言いながら、人気ひとけの無い裏庭を
草をかき分けながら進んでいくと、
用具入れと化した温室が見えてきた。

「・・・？　それで、どこの窓ガラスが
割れているんだ？」

ドアの窓ガラスを見ると、
割れている様には見えない。

その時だった。

「っ・・・！！？」

後ろで栗原が動く気配を
感じた途端に、

後頭部に強い衝撃が走った。

「はい、ちょっとチクツとしますよー」

何か腕や足に刺さったみたいだった。

見てみると、栗原は注射器を持っていた。
傍らに大きめの石が落ちていた。
かたわ

それで俺の頭を殴ったのだろう。

サーツと血の気の引く音が、
本当にしたような気がした。

「な・・・何するっ・・・!？」

「ちょっと動けなくするだけですから、全然
平気ですよー。死にはしないですから！
心臓に刺さなければねっ」

後頭部がまだズキズキと痛いが、
オレは抵抗しようと起き上がろうとした。

「あ・・・あれ？動かない・・・!？」

何故か足や腕が少しも動かない。

「栗原、お前っ・・・何をした!？」

「えへへー筋弛緩剤、
きんしかんざい
使っちゃいました」

「き・・・きんしかんざい？
何だそれ・・・！？」

「簡単に言えば、
筋肉を硬直させちゃう薬です」

やはり栗原はこーいうヤツだったのか・・・！
あの時、少しでも信じなければっ・・・！！

「あの錠剤にも・・・
何か入って・・・いたんだな！」

腕や足が動かない事からの恐怖か、
口が思えつように動かず
上手く喋しゃれない。

「・・・さっきの錠剤のコトですか？」

ふと、栗原の顔付きが変わった気がした。
オレを蔑あはむ様な目をしていたハズなのだが、
その目はどこか悲しげに見えた。

「ああ・・・そうだ。さっきのも、そうだろ・・・！」

「・・・まあ、そーゆー事にしといて下さい。」

「は？どっち、なんだ、よ？」

「・・・とりあえず先生は、ここで寝ねっ転がつて
おとなしくしていて下さい。私は忙しいんで。」

そう言って栗原は携帯を取り出し、

誰かに電話をしながら走って行ってしまった。

叫ぼうにも、叫んだら栗原に何をされるか分からないので、
迂闊に大声は出せない。

・・・でも、オレには栗原の行動が少し疑問だった。

オレが動けるようになったら、俺が誰かに言うに、

決まっているのに・・・証拠をあまりに残し過ぎだ。

まあ、そこらへんにいる普通の女子高生なら、

まだ分かる。だが・・・

栗原は上限のIQ160程度を軽く上回っていて、それどころか
IQ200さえも上回っているなどと噂される程の、
非常に高い知能の持ち主だ。

そんな栗原が、こんなにも色んな事を見落とすだろうか？

まるで・・・わざと残しているかの様に。

でも、何のために？

オレには全く分からない。

それに、一瞬だけ見せた、

あの表情・・・

何が悲しいのだろうか？

むしろこっちが悲しいっていうのに。

そう思いながらオレは、

動けるようになるまで

虫の飛び交う草むらに

じっと寝転がっていた。

16話 罌 藤田先生目線 (後書き)

そつえばこの間気づいたのですが、
この小説、携帯だと、

とても読みにくいですよね・・・；

全部パソコンからの投稿なので、

携帯でも見やすくする事が出来ないのです・・・

一応、本文改行倍率は2倍にしておいたのですが・・・

やっぱり、見づらいですね^^；

携帯で見てくださってる方々、

本当にすみません・・・><

17話 手掛かり ― 蒼目線 ―

「・・・え？ 今日学校休み？
な、何でなの？ 栗原さん・・・。」

「いやー、休みと言っても
今日丸一日ってワケじゃないから！」

学校に行こうと思って
玄関を出ようとした瞬間、
栗原さんから電話がかかってきた。

内容は、今日は学校は休み、
との事だった。

「午前中は何か学校に偉い人が
来るかなんかで休みだけど、
午後からは普通に来いつて。」

「あ・・・そうなんだ。 教えてくれて、
ありがとう。助かったよ。」

「いやーだつてさ、クラスン中で
一番最初に教室来んのつて
蒼くんだし。 だから一番最初に
言っておかなきゃと思つてね。」

「あ・・・じゃあ、二番目にいつも教室に来る
高畑くん連絡網みたいにな」

「この事を電話で言えばいいかな？」

『あ、それはいいよー。私が言っておくから。』

「ごめん。ありがとう。あ、じゃあ、また。」

そう言って僕は電話を切った。

僕は暇だから、いつも早めに学校に行く。

その後、高畑くんが来る。

高畑くんを初めて見た時、

その真つ赤な髪の色を見て、

ヤンキーみたいな頭だなあと、驚いた覚えがある。

けど、話してみると案外、恐くなかった。

それどころかF組はみんな変わっているけど、

高畑くんはそこ中でかなりまともだ。

人は見かけによらない、というのは本当だと思う。

あと、中山くんも真面目でいい人だと思う。

でも教室にはいつも最後らへんに遅刻しない程度に来る。

でもそれは、中山くんには弟と妹がたくさんいるらしくて、

その子達の見送りや弁当作りなどで忙しいらしい。

そーゆーの、えらいなあと思う。

皆それぞれ、自分なりに頑張ってる。

それに比べて僕は……

僕は、はめんかもくしょう場面寡黙症という、

病気みたいなのをもっているらしい。

その名の通り、場面によって
口数が減る、という病気だ。
僕は学校だと、口数が減る。

原因は、大体分かっている。

女子の過剰な干渉と

男子のいじめ。

女子にはいつも、私と付き合う方がいい、だの
いや、自分と付き合った方がいい、だのとうるさくて、
男子は、女子にやたら好かれてる僕を憎んで
悪口を言われたり、水をかけられるだの酷い事をされた。

そのせいで僕は学校を休みがちになり、
軽い女性恐怖症みたいなのにもなった。
そして、休みがちだったからか
僕は留年する事になり、今に至る。

学校じゃなければ普通にしゃべれる。
さっきの電話も、場所は一応、家にいるからだ。

この、あと少しで腰まで届くくらいの
長い髪も、自分の顔を隠すため。
この髪型にしてから、女子からは逆に嫌がられるようになった。
それに僕はもともと靈感があるから、
僕には、こーゆー髪型の方が似合う。

でも、F組に入ってから、僕は少し変わった。
長い髪は相変わらずだけど、
軽い女性恐怖症だったはずなのに、

僕はF組の女子とだけは接する事が出来るようになった。

そして、一人の女の子を好きになった。
女性恐怖症になってから初めてのことだ。
もう、女性恐怖症は治っているんじゃないかと思ったけど、
どうやらF組の女子以外は無理なようだ。

でもまあ、良かった。

せめて、F組の女子だけでも・・・ね。
本当はもちろん、完治を望むが、
そんな我がままは言っていられない。

・・・そういえば、さつき栗原さんが言ってた事。
偉い人・・・？ 何だろう。

僕はさつきから、少し引つかかっていた。

もし、学校に偉い人が来るなら、
事前に先生が言うはず・・・
ましてや、僕たちが休む事になる程の人だったら、尚更だ。

・・・どうしよう。

気になって仕方がない。
皆、変だと思わなかったのかな・・・？
もしかして、そう思っているのは、僕だけ？
ますます気になってきてしまった。

とりあえず、他の人に聞いてみよう。
携帯のアドレス帳に書いてある
F組、皆の番号に電話をかけてゆく。

だが……

何故、誰も電話に出ない!!??

電話に出んわ……

くだらない事がつい、頭に思い浮かぶ。

でもまだ、一応連絡していない人は一人、居るのだが……
恐いから、ちょっとかけるのを躊躇^{ためら}われるな……

それでもしょうがないので、

渋々、携帯のアドレス帳から高畑くんに電話をかける。

『……はい。』

呼び出し音が三回くらい鳴ったところで、
高畑くんが電話に出た。

「あつ……あの、高畑くん？」

えと……あの、その……」

何からどう話せばいいか分からず、
おろおろ戸惑う僕に、高畑くんは

『んだよ。』

あわてやがって。

キシヨいんだけど。

……何、学校の事?』

「え? あ、うん。」

栗原さんから電話、あつたよね?」

『おう。 あったぜ。』

「つかさ・・・栗原といいお前といい・・・
なんで電話なんだよ？ 今の時代には
メールという素晴らしい技術があんだろ。」

そして、いきなり高畑くんは難しい専門用語を使いながら、
メールと電話について熱弁し始めた。

頭痛がするようなわけの分からないカタカナの羅列を
さらさらとつかえずに言う高畑くんを見て、
機械系おたくなのかなあと、ふと思った。

だが、僕はメールが苦手なのだ。

少しの文章でも、ありえないほどに時間がかかる。

だから、いくら熱弁されても困るだけだ。

しばらくすると、言いたい事を言い切って満足したのか、
ふう・・・と受話器越しに高畑くんが息を吐き、

『ま、いや・・・なあ、そういえばさあ、
栗原の言ってる事、なんかおかしいと思わねーか？』

「っ・・・！」

それ、僕も思った・・・

だから、高畑くんに電話かけたんだけど・・・」

良かった。同じだった・・・

『んー・・・やっぱそーか。』

アイツ、ついに動き出しやがったなあ・・・」

ん？

・・・ついに？

高畑くんは・・・何か知っているのか・・・？

「あのっ・・・高畑くん、それ、どーゆー意味？」

つい、聞いてしまった。

『あっ・・・ヤベツ・・・』

じゃなくて！！

いや、その、何でもねーよ。』

「はぐらかさないでよ。」

『うつ・・・』

僕はピシヤリと言い放つ。

ここは学校じゃない。

そう。普段の僕はもっと、強気。

普段と違う僕に驚き、焦ったのか、

『ッ・・・分かったよ。』

教えてやつから、今から俺ん家^ち、来い。』

暫^{しば}しの沈黙の後、

めんどくさそうに高畑くんが言った。

「高畑くんの家？」

『そ。

メールで地図、送ってやつから。

それでも分かんなかったら、電話しろ。じゃ。』

ブツツ。ツー、ツー、ツー……

……一方的に電話を切られてしまった。

高畑くんの家……かあ……

うわさによると、一人暮らしだって聞くけど。

とりあえず、行ってみよう。

だが、その後送られてきた地図は、少し拡大された地図に、
ウチの学校と、近くの駅と、

高畑くんの家の場所と思われる所に、赤い丸が。

文章も何も無しに、

地図だけ。

「……さすがにこれは無理だよ……」

そして、電話で何度も怒鳴られながら、

どうにか高畑くんの家までたどり着いた。

結構綺麗な、マンションだ。

部屋の番号を聞き、

その部屋のドアの前まで来た。

ピンポンとインターホンを押すと、

それに出ずに、高畑くんがいきなりドアを開けて出てきた。
インターホンの意味、皆無。

凄く速さで開いたそのドアにぶつかりそうになったが、
かろうじて、その前に軽く避けた。

「・・・ん。入れよ。」

顎を自分の部屋の方へくいと動かし、
ドアを開けたまま、すたすたと奥へ行く。
僕はあわてて入り、ドアを閉めた。

高畑くんの入っていった部屋を見ると、
どうやら寝室のようだった。

ベッドと、本棚と、机。

そしてその机の上に、電源の付いた
デスクトップのパソコンが。

殺風景すぎる。

何か、もっと散らかっているイメージがあっただけど・・・
でもまだ部屋はあるし、そこが散らかっているのかも。

ここのマンションの部屋は、
高校生が一人で住むには十分大き過ぎる所だった。

奥にリビングらしきものが一つ、

そして、おそらくそのリビングにも、何部屋があるだろう。

この寝室が一つ、

あと、トイレらしきものが一つ。

あとその他もろもろで・・・

7、8つ。

ざっと見て、7、8つは部屋があると思う。
恐らく、3LDKくらいだろうか。

少し・・・広過ぎる、かな？

そんな事を思っていると、

高畑くんはパソコンの置いてある机の椅子に座り、
机の引き出しから、徐に眼鏡おもむろを取り出した。

「・・・っ、

高畑くん、眼鏡するんだ・・・？」

意外・・・

意外過ぎる。

似合わないさ過ぎる。

・・・失礼だな。うん。

そんな僕の思考を読み取ってからか高畑くんは、
手を止め、こっちを見て、

「んだよ。何か文句あんの？」

僕を軽く睨んだあと、

まあいいやとでも言うように、眼鏡をして、

またパソコンのキーボードを打ち始めた、高畑くん。

何これ・・・誰？

目の前に広がる光景が、

あまりにありえなすぎて、混乱する。

・・・あれ、そういえば、

高畑くんって良く見ると・・・

結構、かつこ良い。

銀縁の眼鏡をして、
真剣にパソコンに向き合う高畑くんは、
普通にかっこ良く見える。

これなら結構、女子にモテるんじゃないかなー・・・

「おい、オマエ。」

「えっ！？ な、何？」

ぼーっとそんな事を考えてると、
いつの間にか高畑くんが手を止めこちらを見ている。
いきなり声をかけられ、少し、ビビった。

「あのさあ・・・

いつまでもそんなトコ突っ立ってないで
早く入って来いよ。そこまで遠慮されると調子狂うんだけど。」

「え？ あ・・・」

僕はまだ、寝室に入らず、
廊下で突っ立っている。

どうしようかと、おろおろとして、

廊下のフローリングの軋む音がした。

・・・だが、いきなり人の家にきて、
いきなり寝室に入っているのだろうか？
なんていうか・・・まあ、失礼でもあるけど、
なんか・・・なんていうか・・・

僕はいつの間にか顔が赤くなっていたみたいで、
高畑くんが一瞬、驚いた顔を見せ、
また、眉間にしわを寄せる。

「オイ・・・オマエまさか、
栗原と立花に色々言われて、
ソッチ系に走ったんじゃないだらーな・・・」

「え！？ いや、違うよ！！
・・・失礼、します。」

恐ろしい誤解を解くため、
おずおずと入る。

すると、高畑くんは目をパソコンに戻し、
またキーボードを打ち始める。
それにしても、すごい速さでキーボードを打つ。
何かすごいなあ・・・と、英斗くんに気迫負けしていると
しばらくしてから、

「ん。これ。見てみ。」

と、高畑くんがこつちを見ながら、
パソコンの画面を指さす。

素早く動いていた手はもう、止まっていた。

恐る恐る画面を見ると・・・

「・・・え？ これって・・・」

すると、高畑くんは淡々と言った。

「これ、警察の秘密のデータベース。まあその、金とか権力とか使って自分の犯した罪を無き物にした、最ッ悪なやつら。」

そんな警察の秘密のデータベースにアクセスできる英斗くんに驚いた。けど・・・それよりも前に・・・

雑誌やテレビで一度は見た事のある、超有名人とか大物の中に、一人だけ、幼い、平凡な顔。

恐らく、中学生くらいだろう。

だが、その中学生の顔に少し、見覚えがあった。今より少し鋭さに欠けるが、

中学生とは思えない、冷たい表情。

光の無い、黒い瞳・・・・・・・・

間違い・・・・・・・・ない。

この人は・・・・・・・・

「く・・・・・・・・栗原、さん・・・・・・・・？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8874/>

腐女子高校生！！

2011年10月7日10時39分発行